

## 父の聖書

井上夢人

ずつしりと重いその書物を手に取ると、革のカバーが、ぶうん、と匂う。カバーの大きさまで含めると、幅は十七センチ、長さは二十五センチ、そして厚みは五センチほどもある。カバーは、あとになつて加えられたもので、その下の黒革の表紙も、その中身も、すでにボロボロになり手垢てあかに汚れている。古いものではない。一九六四年版の口語訳旧新約聖書である。父の遺品として僕がもらい受けたただ一つのものだ。

書物を——しかも、聖書などというものを「道具」だと言つてしまつたら、眉まゆをしかめる人もいるかもしれない。しかし、父にとつて、この聖書に優まさる道具は他になかった。父は、キリスト教の牧師ぼくしをしていた。

自分の仕事を継いでくれることを願つていた父に逆らつて、僕は牧師はおろか信者にすらならず、したがつて洗礼も受けようとはしなかった。僕は自分の職業として推理作家を選び、たいそう父を失望させた。僕の書くミステリー小説について、父はほとんど意見を言わなかった。ひとことポツリともらしたことがあるだけだ。

2 「人を殺す話ではなく、人を生かす話を書いたらどうかなあ」

父は、聖書の中に書かれた放蕩息子とその父親に、自分たちを投射して見ていたに違いない。親に逆らつて家を出た放蕩息子は、長い旅の果に父の元へ戻つて行くという話である。現実の父は、とうとう死ぬまで息子の戻る姿を見ることはできなかったのだけだ。

そんな僕が、父の葬式が終わつた後、一つだけ欲しいと言つたのが、この聖書だった。一枚一枚ページを繰れば、誰もが驚いて眼を丸くする。千七百ページを超えるその全ページの余白が、細かく書き込まれた文字で埋め尽くされているからだ。視力のあまりよくない人なら、虫眼鏡でも持つて来ないと判読できないほどの細かい書き込みである。そのすべての書き込みを、原稿用紙に書き写したら、数千枚を積み上げることになつてしまう。

書き込まれているものは一様ではない。その該当ページの記述に対する解釈や注釈、父の個人的な体験に関連づけた随想風のもの、他の書物からの引用、世の中の出来事と聖書の記述を照合させた検証……とにかく、父の頭の中で繰り広げられた世界のすべてが、ここに押し込められている。

礼拝や祈祷会に集まつた信者たちを前にして、父はこの聖書を掲げ、声を張り上げて説教を繰り返した。言わば、この聖書は、父にとって自家製の虎の巻だったのだ。

——ギリシヤの切手を封筒のまま手渡された。その消印には「使徒」という意味の文字がある。これは「使命を帯びて遣わされた者」という意味。私は丁度手紙のようなもの。「使徒」であるというスタンプが自分に押されていたことに気づいた。

これは、あるページの父のメモの一部を、そのまま書き出したものだ。

小さなスタンドを手元に引き寄せて、父は毎日、この聖書の上でボールペンを動かしていた。何を書いていたのかを、遺品として受け取つてから、僕ははじめに知つた。これが、父にとっては、唯一無二の道具であり、武器であり、よりどころだったのだと知つた。

僕自身、ものを書く仕事をしていると、多くの書物を道具として使う。事典や辞書はもちろんのこと、専門書や雑誌、新聞やパンフレットの類まで、印刷されたものは、ことごとくに僕にとつて道具である。しかし、父の聖書のように使いこなした道具を、僕はいまだに持つていない。これだけ本を汚した経験もない。

ページを繰ると、おびただしいアンダーラインやメモに圧倒される。ほとんど羨望すら感じてしまう。黄ばんだページに掌を載せてみると、どこかで「人を生かす話を書いたらどうかなあ」と声がする。